清末・民国期における男子服装
――長袍と中山服を中心に――

乗　松　佳代子

はじめに

清末から、20世紀前半期まで中国で栄えた服飾は、中国式服飾と西洋式服飾であった。中国式服飾は、中国で長い間着用され続けていた袍の「長袍」や「長衫」が清末から民国期にかけても中国人の間で多く着用されていた。羽織物としては、「馬褂（ボレロ）」や「馬甲（ベスト）」などである。「長袍」は、中国服の丈の長い服装の事をいう。男子の長袍は一般的には裏付きであり、寒い時に着る綿入れ仕立てもある。清末までの中国の礼服は長袍と馬褂、下に中国式ズボンを穿き、頭に小さな中国式の瓜皮帽あるいは羅宋帽を被り、布靴あるいは綿入れの靴を履いていた。清末までの「袍」の色は明るい色で、「褂」の色は濃い色で作製されていた。長衫は長袍の簡略化した服装である。

一方、清末から中国の西洋式服飾として、上下組み合わせのスーツスタイルの背広が、着用されるようになった。これは、海外から帰国する留学生が次第に増加し、西洋から来訪する外国人がますます増えたことが影響している。

辛亥革命の直前には、上層階級の人々の間で、服飾が西洋化する傾向が見られた。その頃には、公的な場において、スーツを着用することが浸透しつつあった。さらに、1905年、孫文が日本に滞在していた時、紅幇裁縫師の張方誠が孫文に初めての中山服を手渡し、孫文はそれを着用して上海に帰国した。それが、孫文考案の中山服が中国の服飾社会に出現した最初であった。当時の作品は、前身頃に9つのボタンが付き、立ち襟であった。しかし1912年、孫文が中華民国臨時大総統就任の時、孫文は中山服を着用して総統府入り口で前中心5つのボタン付き、台付きカラーのYシャツカラーの中山服を着用して写

真に収まっている。その頃から中山服は、民国期の男子服装の仲間に入ることとなる。以後、細かなデザインの変更はあったが、中山服の基本的なシルエットは今日でも変わらない。孫文は、中国の近代化の革命運動の中心的な指導者として崇められてきた。その孫文は、清朝打倒の革命リーダーとして、服装の変化をもたらす政治的意義を深く理解していた。彼は、清朝まで続いた辮髪を廃止、髪を短く、服装を変えることを革命のシンボルとした。そして、中華民国人民は、一律平等で民族階級と宗との区別をしないという『中華民国臨時約法』を規定した法令を出した[1)]。

なお、1912年10月、民国政府は、初めて正式な服飾法令として「民国服制条例」を発表した。それは、西洋の服飾を参照し、中国人の礼服を規定し、三つ編みを切り、髪形を短くし、服の形も変えた。「剪瓣易服」が存在した王朝と同じではなく、「剪瓣通令」を改め、官員の服装から、新しい礼服を採用、旧の礼服の礼式官服は廃止された。この服飾制度は、大きく三つに分類されている。第一は西洋式礼服、第二は公服（公務に従事する際の服）、そして第三は常服（中国式服装と西洋式服装）である。なお、長袍を着用した際、西洋式帽を被ることとなった。特に大礼服は、中国式服装の長袍馬褂に代わり、基本的にイギリススタイルであり、ヨーロッパの燕尾服の様式に類似している。帽子は黒の礼服用、襟は活動的なシャツカラーの上衿の先が90度に折り返っている燕尾服着用の折れ襟で、固定化した燕尾服である。ズボンは西洋式黒のスラックスを履く。靴は黒の革靴を履くこととなった[2)]。

また、民国18年（1929）、国民党民国政府により新服制条例が規定された。民国服制条例との変更点は、中国式服装の長袍馬褂が中国国内の礼服と規定され、中山服は外交用礼服となった。同時に中山服は公務員の制服となった[3)]。

なお、先行研究で得た内容を後述する。陳蘊茜氏は、民国期初頭に現れた中山服の存在について、学術月刊誌の「身体：国家権力与中山服的流行」で次のように述べている。

> もともと、広大で農村部が広い中国にとって、政府で働いている人は制服を着る人は少ない。政府で仕事をする人たちの制服にしては、中山服の影響は限られているはずである。しかし、その革命時代、中山服は革命の象

徴として若い人たちに受け入れられ、中山服は一種のファッションとなった。しかも、1925年、国民党が強く孫文を尊敬したため、中山服の流行はファッションとして流行するだけではなく、国家は民衆の服装の流行を導いた結果となった。[4)]

上記に述べた陳蘊茜氏の「中山服の流行はファッションとして流行するだけではなく……」と述べているが、孫文を尊敬する若者たちが、中山服を着用するようになった、と理解する。「ファッションとして流行するだけではなく」は、政治的色彩を帯びた服ゆえ、一般的には、「流行する」ではなく、「関心が向けられた」ではないだろうか。「ファッションとして流行する」の「流行」の言い回しには、筆者は異議を唱える。上記に掲げた陳蘊茜氏の引用の同じ論中に、中山服は孫中山の符号と三民主義を浸透していった服装とされていると述べている。中山服は、着用してはじめて重厚な服装となり、価値観と意義を帯びる衣服であると受け止める。ゆえに、当時の中山服は特殊な人たちだけが着ることができた服であったのではないだろうか。このことは、小稿において考察すべき内容である。

また、中山服の広がりについてアントニア・フィナネ氏は、「1920年、中山服は若き革命家の間で人気が出た。そして民族革命と歩調を合わせ、小さな田舎街でも一般的な衣服として広まっていった。民主革命の後、北部（現在の北京周辺）の人々の間でこの衣服の着用が増えてきた。」[5)]と述べているが、同氏が中山服に関して述べている年代を考えると、1920年頃、まだ中山服は、北京市周辺の田舎町で着用する人たちが実際は多くなかったのではないかと推測する。その当時の北京は知識者が多く、長袍馬褂、長衫を着用している中国人が多かったのではないだろうか。そのような服飾状況の中、外国人から見れば、西洋服の上下に分かれたスーツスタイルの中山服は、変わった服飾状況を垣間見る思いであったのかもしれないと理解する。

なお、先行研究で得た内容は、実際には中国伝統衣裳との着用状況のバランスはどうであったのか。写真収集の資料を「生活類」と「政治類」とに分類し、それを分析して、その結果、実際の着用状況を明らかにする。ゆえに、小稿では、清末から民国期において、男子服装（長袍と中山服を中心）について

の考察した事柄を時代背景に沿って表にまとめ、データーをリストアップし、論中に掲げることにする。それによって表に掲げた内容を参照し、時系列に沿って収集した内容を分析、中国式服装と西洋式服装のそれぞれの広がりについて、また、相反する内容を検証し、比較しながら項目ごとに中国人の男子服装の着用状況とそれに伴った活動状況について言及することで、小稿のタイトルの内容が解明されることになる。

1．生活

表1－1　生活―孫文と宋慶齢

1－1－1	1－1－3
 登場人物：孫文。 年代：1906年。撮影場所：日本。 孫文は、西洋式服装の背広の種類で三つ揃いのタキシードを着用する。東京で中国同盟会を成立。 出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書館股份有限公司、1994年（香港。台湾出版）、15頁。	 登場人物：孫文。 年代：1914年。撮影場所：上海。 当時、孫文は学生服が好きな服であった。上海で学生服を着用した。 出典：袁仄，胡月『百年衣裳』、生活・読書・新知　三联書店、2010年、117頁。
1－1－2	1－1－4
 登場人物：孫文と宋慶齢。 年代：1911年。撮影場所：広州。 孫文は立ち襟、前中心6つのボタン、内ポケット付き（外ポケットなし）の企領文装を着用し、宋慶齢は長袍馬褂を着用する。 出典：廖軍・許星「中国服飾百年」、上海文化出版社、2009年、87頁。	 登場人物：孫文と宋慶齢。 年代：1916年。 撮影場所：東京日比谷大武写真館。 孫文は西洋式服装の背広の三つ揃いを着用、宋慶齢は西洋式服装の礼服を着用する。 出典：趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史文化博物館、2011年、48頁。

1－1－5

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1917年。撮影場所：広州大元帥府。
孫文は立ち襟、前中心6つのボタン、内ポケット付き（外ポケットなし）を着用し、宋慶齢は長袍馬褂を着用する。
出典：「中山記念館」にて2008年、筆者が撮影。

1－1－7

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1923年。撮影場所：北京。
孫文は立ち襟、前中心7つのボタン付き、4つの外ポケット付きの中山服を着用し、宋慶齢は長袍馬褂を着用する。
出典：趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史博物館、2011年、107頁。

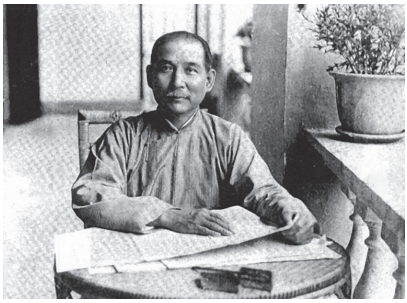
1－1－6

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1920年。
撮影場所：広州にて広州大元帥府。
孫文は立ち襟、前中心6つのボタン、内ポケット付き（外ポケットなし）、企領文装を着用する。宋慶齢は長袍馬褂を着用する。第2护法運にて。
出典：「孫中山記念館」にて2008年、筆者が撮影。

1－1－8

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1924年。撮影場所：広州。
孫文は前中心7つボタンの中山服を着用し、宋慶齢は短装を着用する。
出典：袁仄，胡月『百年衣裳』、生活・読書・新知　三联書店、2010年、115頁。

1－1－9



登場人物：孫文。
年代：1924年春。撮影場所：上海。
孫文は多忙のひと時、長衫を着用する。中国国民党広州第一次全国代表大会。大会政綱制定党年。国民党組織改正。
出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書館股份有限公司、1994年（香港。台湾出版）、59頁。

1－1－10

登場人物：孫文。
年代：1924年。撮影場所：上海。
孫文は7つボタンの中山服を着用する。
出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書館股份有限公司、1994年（香港。台湾出版）、115頁。

1－1－11

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1924年。撮影場所：日本の春洋丸の船上。
孫文は台付きカラー、前中心7つのボタン、4つの蓋付き、アウトポケット付きの中山服を着用し、宋慶齢は短装を着用する。
出典：趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史博物館、2011年、107頁。

1－1－12

登場人物：孫文と宋慶齢。
年代：1925年1月。
撮影場所：孫文死去の数日前に北京で撮影。
孫文と宋慶麗は、中国式服装の長袍馬褂を着用する。
出典：趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史博物館、2011年、75頁。

「表1－1　生活―孫文と宋慶齢」では、孫文と宋慶齢の私的な写真を12枚収集した。この表から考えられることは、孫文はその時々に自分の参加する会、状況に応じて着用する衣服を選んでいる。もちろん時代背景に伴ってであるが、孫文は出向く場所、家庭でくつろぐ時など、状況に応じて着用する衣服が異なっている。1－1－1、4は、同盟関係の会へ出席した時の服装の状況である。孫文は、西洋式服装のフォーマルな三つ揃いの背広を着用している。ただし、1－1－4の年代は、既に中山服が中国の服飾社会に出現していたはずだが、孫文は未だ公の席に中山服を着用していなかったようである。1－1－3では、孫文は学生服に関心があり、時々学生服の上着を着用していた。この写真は、孫文の学生服着用の写真である。1－1－5、6では、孫文は公の席でも企領文装[6)]のジャケットを着用している。写真で見る限りでは、企領文装と中山服のデザインはよく似ている。孫文が着用している企領文装は、華僑が海外から中国に持ち帰ったデザインとされている。孫文は、企領文装の服装を愛用し、そのデザインと、学生服のデザインが中山服のデザインの参考となったと多くの文献資料に掲げられている。1－1－7～11によると、1920年頃より孫文は公の席に前中心７つボタン付きの中山服を着用している。公の席に着用するようになったのは、写真の資料からの考察では、中山服の登場からだいぶ時間がかかっていることになる。また、1－1－3の写真に掲載されているように、孫文は学生服をくつろぐ為に好んで着用し、1－1－9、12の写真で見られるように長袍馬褂をも着用している。

以上、表1－1を参照した結果、孫文の中洋式衣服の着用状況を分析し、解説した。中国人にとって中国式伝統の服装は、自然な着こなしができる衣裳であるので、孫文と宋慶齢にとっても長袍は身近に着用できる衣裳であったと伺える。ただ、長袍、長衫は、着丈が長いので活動的でないと孫文は述べている。ゆえに、孫文は中国の人々が親しみ易く、リラックスでき、動きやすい理想的な服装として中山服を考案し、中国の服飾社会に登場させている。

表1－2　生活―家族

1－2－1

登場人物：謝氷心(左)、謝为涵(中)と父親(右)。
謝氷心(作家)の幼少の頃の父と弟。
年代：1908年。撮影場所：山東省烟台。
中国式服装の長袍を着用する父親と子供たち。
出典：丁錫強『中華男装』、上海世紀出版股份有限公司学出版社、2013年、242頁。

1－2－3

登場人物：ある中国人家族。
年代：民国初期。撮影場所：上海。
民国初期のある家庭の衣服の着用状況。
出典：廖军・许星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年、74頁。

1－2－2

登場人物：ある一家の家族（3人の妻とそれぞれの3人の子供と父親)。
年代：民国初期。撮影場所：中国の地方都市。
全員が中国式服装を着用する。帽子は瓜皮帽を全員被り、幼児2人は長袍馬申を着用、その他5人は長袍馬褂を着用する。
出典：丁錫強『中華男装』、上海世紀出版股份有限公司学林出版社、2013年、223頁。

1－2－4

登場人物：ある北京の家族。
年代：1919年。撮影場所：北京。
全員が長袍馬褂を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、山東画報出版社、1998年、12頁。

1－2－5

登場人物：中国人の伝統家庭の家族。
年代：1920年。撮影場所：不明。
新思想を受けた伝統家庭の影響した、新旧服装を着用した、家族。中山服着用の父親と旗袍を着用の母親に短装着用の娘の着用状況。
出典：袁仄・胡月『百年衣裳』、生活・読書・新知　三联書店、2010年、第3章のグラビア頁。

1－2－7

登場人物：梅一族（中国の知識人揃いの一族）。
年代：1928年。撮影場所：北京。
8人全員が長袍を着用する。梅一族は知識人揃い。秀才一代と言われている。早くから中国の教育市場で重要な地位を築き、清華工学院、農業、航空、無線、電気、国の主な情報の五代研究所を作る。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、山東画報出版社、1998年、29頁。

1－2－6

登場人物：言語学教師の陸宗達家族（家族全員が長袍を着用）。
年代：1920年。撮影場所：北京。
全員が長袍を着用する。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、3輯、山東画報出版社、1998年、グラビア。

1－2－8

登場人物：一般市民の中流家庭。
年代：1930年。撮影場所：北京。
全員が中国式服装の長袍を着用する。愛情あふれる家庭の様子。
出典：煦等『百年中国社会影像』、三聯書店（香港有限公司）、2013年、57頁。

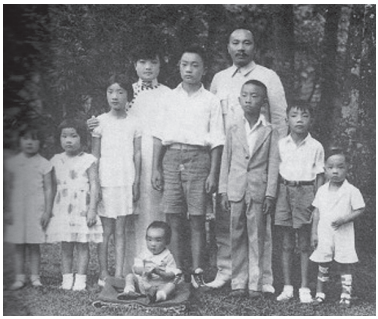
1－2－9

登場人物：中国の中流階級の家庭。
年代：1930年。撮影場所：南京。
老人と子供を中心に中国式服装の長袍を着用する。
出典：煦等『百年中国社会影像』、三聯書店（香港有限公司）、2013年、57頁。

1－2－10

登場人物：元清華大学校長林贻琦の家族と弟家族。弟は郵便局の職員。
年代：1934年。撮影場所：済南。
両親は中国式服装の長袍を着用する。子供は西洋式服装（セーター、ブラウス、ズボン、スカート）を着用する。中国文学教師20年。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版参　老照片』、11輯、山東画報出版社、2000年、30頁。

1－2－11



登場人物：朱培徳一家（夫婦と8人の子供）。
年代：1935年。撮影場所：江西省庐山牯岭。
全員、西洋式服装を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、19輯、山東画報出版社、2001年、49頁。

1－2－12

登場人物：中国の裕福な家庭（全員毛織物素材）。
年代：1936年。撮影場所：不明。
家族全員が、毛織物素材の西洋式服装を着用している。
出典：廖军・许星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年、106頁。

1－2－13

登場人物：北京の一般家族（４世代家族）。
年代：1936年。撮影場所：北京。
子供は中山服風らしき服を着用する。４世代の大人は、長袍を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、4輯、山東画報出版社、1998年、15頁。

1－2－15

登場人物：中国の中流階級の家庭（古建築の職人）。
年代：1937年。撮影場所：上海。
11人中、娘たちはチャイナドレスを着用し、息子たちは、中山服風らしき制服を着用する。両親は中国式長袍を着用する。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、5輯、山東画報出版社、1998年、95頁。

1－2－14

登場人物：董作賓（考古学者）は孫をだき、長袍を着用する。
年代：1936年。撮影場所：河南。
出産後間もない孫を抱いている父と娘は、中国式服装の長袍を着用する。
出典：潘光哲『何妨是書生』、広西師範大学出版社、2010年、139頁。

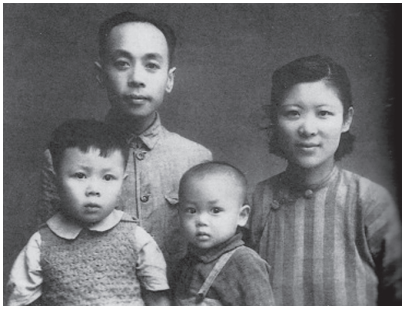
1－2－16

登場人物：黄万里の家族（アメリカで工学博士の学位を取って帰国した）。
年代：1937年。撮影場所：上海。
大人は企領文装を着用し、子供は中山服風らしき制服を着用している。父親は瓜皮帽を被っている
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版参　老照片』、15輯、山東画報出版社、2000年、43頁。

1－2－17

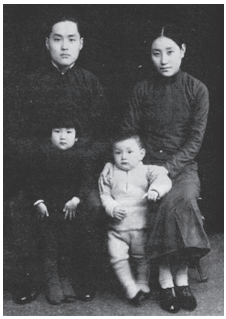
登場人物：吉林省抚松県の一般家庭。
年代：1942年。撮影場所：吉林省。
寒い地方の生活なのか、5人全員が綿入れの長袍を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版弐　老照片』、10輯、山東画報出版社、1999年、104頁。

1－2－18



登場人物：『悲しい親情』の作者孫蔵と父母と弟。幼少の頃の孫蔵（前列の右）。
年代：1945年。撮影場所：上海。
西洋式服装の背広を着用する。国民党と共産党の戦いの中で、孫蔵は中心人物として闘争、戦死する。彼は日本の帝国大学を卒業している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、19輯、山東画報出版社、2002年、86頁。

1－2－19



登場人物：孔徳成の家族。
年代：1947年。撮影場所：北京。
家族全員が西洋式服装を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、20輯、山東画報出版社、2002年、142頁。

1－2－20

登場人物：「大公報」編集者の王芸生家族。
年代：1948年。撮影場所：上海。
6人の子供たちと共に、家族全員が西洋式服装を着用する。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、19輯、山東画報出版社、2002年、10頁。

「表1－2　生活―家族」では年代別家族の集合写真を20枚リストアップした。1－2－1は清末の家族の写真である。幼児、少年と父親は、当時の服飾状況を物語る中国式服装の長袍を着用している。1－2－2は、民国初期の頃の写真の紹介であるが、家族全員が中国式服装の長袍を着用し、幼児だけは長袍の上に馬甲を着用、少年と大人は皆、長袍の上に馬褂を着用している。さらに、瓜皮帽を 8 人全員が被っている。瓜皮帽は、明代から清代にかけて中国の人々の間で盛んに被られた帽子である。特に地方公務員は、日常的に使用していた。民国元年の民国服制条例に基づいた中国式服装を中心に着用している、当時のファッションである。

1－2－3は、民国初期の上海のある家庭の記念写真である。この家族写真の服装は、8 人中 7 人が漢族の服装の長袍馬褂を着用しているが、後列の右端の女性は、満州族の服装を着用しているのではないかと伺われる。1－2－4、6は、北京の家族である。北京の冬は、寒さが厳しいので、同じ長袍でも上海の着用者と比べると服の生地が厚手に感じる。1－2－3の上海の家族の写真からは、薄手の生地で作製した長袍を着用している状況が伝わってくる。1－2－5は、民国期中頃の 3 人の家族である。母親と娘は中国式服装の長袍と短装を着用しているが、父親は中山服を着用している。父親の中山服の左胸には、中山服のデザインの特長であるペン挿しのポケットがあり、そこにペンが挿してある。

1－2－7は、当時の知識者揃いの一族と言われていた梅一族である。大人 6 人と子供 3 人含めて全員が長袍を着用している。この写真は、新服制条例の草案が下される前の年であるが、中国の伝統的な家庭、特に撮影場所が寒冷な地で襟の有る服を好み、古くから中国の中心都市であり古くからの風習を尊とぶ北京であるが故に全員が中国式服装を着用している。1－2－8、9では、新服制条例の草案が提案され、1929年 4 月に規定された。この表の内容は、その翌年であるが1－2－8の撮影場所は北京であり、1－2－9は南京であるがどちらも中国式服装の長袍を着用して写真に収まっている。当時、一般的な家族の記念写真の服装は、中国式服装をあたりまえのように着用したのではないかと伺える。

1－2－10、12は、民国期後半にさしかかっていることもあるからか、家族の服装は多くの人が西洋式服装を着用している。特に子供達は全員西洋式服装を着用している。中国式服装の長袍は、高齢の人達しか着用していない。

また、1－2－12の写真も、中国の裕福な家庭という見出しで、家族全員が毛織物素材の西洋式の服を着用していると写真の説明に記載されていた。1－2－11は朱培徳の家族であるが、野外での記念撮影は母親だけが旗袍を着用、写真に写っている子供たちは8人全員がセーター、ブラウス、ズボン、スカートという西洋式服装を着用し、父親も背広を着用している。1－2－13～17は民国期の中頃から民国末期までの収集写真である。この時期になると西洋式服装が中山服に代わり、中学、高校生たちの服装は、中山服風の服装を着用している写真がほとんどである。しかし、大人たちは中国式服装の長袍馬褂，長衫を着用している。1－2－18、20の写真の撮影場所は上海であり、両者共、西洋式服装を着用している。登場人物は、上海でかなりの有名人であり、1－2－18は、『悲しい親情』の作者孫蔵と父母と弟であり、また、1－2－20は、「大公報」編集者の王芸生家族である。

以上の表は時系列に沿って、中国の中流階級家庭の紹介と服飾の着用状況を明らかにした。登場人物の滞在する環境、特に住んでいた場所によって日常着用する衣服がそれぞれ異なってくる。この表に登場する人々は、裕福な家庭が殆どで貧富の差が少ないため、住んでいた場所等のおかれている環境によって、服装の着用状況が異なることとなる。表の写真の内容を整理すると、北京在住は中国式服装の長袍、長衫の着用者が多く、上海は西洋式服装の背広と中山服風の服を着て写真に納まる家族が多く見受けられた。このことは政治的、社会的、経済的、文化的面で服飾状況が異なってくるという事である。

この項目では、清末から20世紀前半期までの中国で、男子の服装はどのように着用されていたのかを検証している。住環境により、どのように服装が変わっていったのか。北京は学問、政治に関わる人たちが多く在住。風土も北方寄りで漢民族が集中する場所でもあるため、中国式服飾が自然と身につき着用されることになった。港が存在する上海は、海外の文化に触れる機会が多く、服飾にも常に新しい風が入り、東洋式から西洋式と多くの文化の要素を採り入

れることになった。そして、時代の移り変わりと共に、服飾の世界も移り変わっていくという事である。

「表1－2」の生活の家族写真で、1－2－5の民国期中頃の 3 人の家族の写真がある。その家族写真で父親が中山服を着用している。写真に写っている父親の中山服の左胸には、中山服のデザインの特長であるペン挿しのポケットがあり、そこにペンが挿されている。他の写真の中で、中山服着用者にはなかなか出会わなかったが家族写真収集の中で、唯一中山服着用の写真を見ることができた。

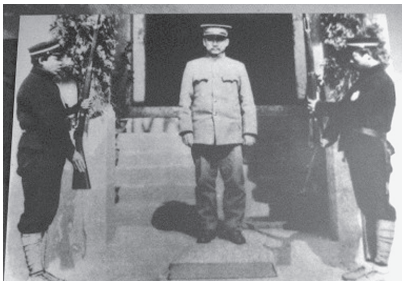
2．政治

表２　政治

2－1

登場人物：孫文と諸同志。
年代：1907年。撮影場所：南京。
秋瑾の葬儀後、彼女を偲んで同志たちが集まって写真を撮る。
出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書舘股份有限公司、1994年（香港・台湾初版）、24–25頁。

2－3

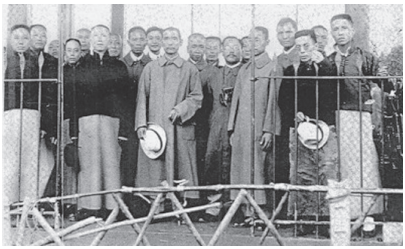


登場人物：孫文。
年代：1912年1月。
撮影場所：南京総統府事務所前入口の階段にて。
孫文は、立ち襟に前中心に5つのボタン付きの中山服を着用して中国の服飾社会に出現した。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－2

登場人物：孫文は山東済南に行き現地での迎えの人々との状況。
年代：1912年。撮影場所：済南。
孫文は西洋式服装の背広を着用して、済南へ視察に行く。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壹　老照片』、3輯、山東画報出版社、2000年、97頁。

2－4



登場人物：孫中山と革命の同志たち。
年代：1916年。撮影場所：浙江省。
孫文はオーバーコートを着用する。同志は、写真に写っている範囲では長袍馬褂を全員が着用し、西洋帽を手に持っている。
出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書舘股份有限公司、1994年（香港・台湾初版）、44–45頁。

2－5

登場人物：孫中山と革命党の同志たち。
年代：1916年。撮影場所：日本の東京。
孫文は中山服を着用し、宋慶齢は西洋式服装のアンサンブルを着用する。袁世凱が帝政を取り消した祝賀会を日本で催した。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

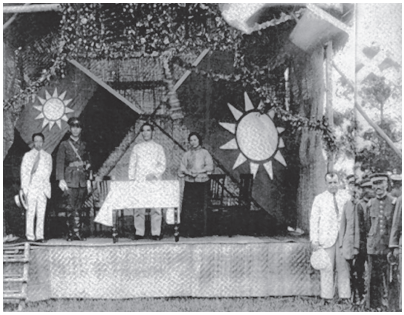
2－7

登場人物：孫文と、他、黄埔陸軍師範学校の設立に関わった関係者たち。
年代：1924年。撮影場所：広州。
孫文は中山服を着用し、他の幹部の出席者たちは、中国式服装の長袍を着用している。ソビエトや中国共産党の協力を得て、陸軍師範学校を開校する。
出典：趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史文化博物館、2011年、53頁。

2－6

登場人物：孫文と国民党同志。
年代：1922年。撮影場所：上海。
16人中、孫文は中山服を着用し、長袍が6名、背広が9名着用している。上海寓所三次召集を上海の孫文の住まいで、上海国民党の責任者たちと集会を行う。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－8



登場人物：孫中山と宋慶齢、その他関係者。
年代：1924年。撮影場所：広州。
孫文は中山服を着用する。壇上に孫文と宋慶齢が立ち、孫文は開校の祝辞を述べる。なお、蒋介石は黄埔陸軍師範学校の校長となる。
出典：萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書舘股份有限公司、1994年（香港・台湾初版）、64頁。

2－9

登場人物：胡漢民他政府中心人物。
年代：1927年。撮影場所：南京。
政府代表の長老たちは、前列に座っているが、その長老の中、6人は中国式服装の長袍を着用している。また、その他の多くの人は西洋式服装の背広、軍服を着用している。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－11

登場人物：蔣介石、他国民政府代表たち。
年代：1928年。撮影場所：南京。
蔣介石は長袍を着用する。蔣介石は国民政府主席となり、国民党重新制定国民組織法、五院成立。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－10

登場人物：蔣介石（国民党二回五中全会議）。
年代：1928年。撮影場所：南京。
蔣介石は長袍を着用する。35人中、長袍18名、中山服11名、背広が6名である。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

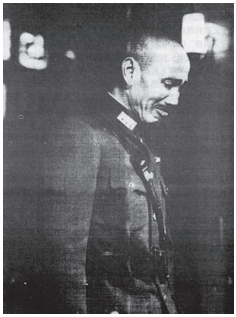
2－12

登場人物：孫科を中心に、「カーハ事件」の後、行政院のメンバーたち。
年代：1931年。撮影場所：武漢。
10人中、中国式服装の長袍が6人、西洋式服装の背広が4人着用している。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－13

登場人物：蒋介石（行政院委員長）と川越茂日本駐華大使。
年代：1936年。撮影場所：南京。
蒋介石は中山服を着用する。川越日本駐華大使は西洋式服装の背広を着用する。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－14



登場人物：蒋介石。
年代：1937年。撮影場所：南京。
朱培独の葬儀に列席悲しみに沈んでいる蒋介石の表情。蒋介石は中山服を着用している。
出典：山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、19輯，山東画報出版社、2002年、56頁。

2－15

登場人物：重慶国民政府の集まりで陳其采、他主計所の人たち。
年代：1946年。撮影場所：重慶。
85人中、長袍が1人着用し、他は中山服と背広が多く着用する。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－16

登場人物：重慶にて談判時の蒋介石と毛沢東。
年代：1946。撮影場所：重慶。
蒋介石と毛沢東は、前中心5つボタンの中山服を着用する。
出典：胡波『中山装』、広東省出版集団・広東人民出版社、2008、82頁。

2－17

登場人物：監査院長（右）と中国国立中央研究院評議会。
年代：1947年。撮影場所：南京。
36人中（背広34名、長袍1名、軍服1人）。
出典：南京の総統府にて、2009年に筆者撮影。

2－19

登場人物：監察院第一回会議の蔣介石（蔣介石は着席している右側の人物）。
年代：1948年。撮影場所：南京。
蔣介石（舞台に座っている右側の人物）は、中山服を着用している。監査院第一回会議を開催、の写真である。
出典：南京の中山陵にて、2009年に筆者撮影。

2－18

登場人物：国民政府代表たち
年代：1948年。撮影場所：南京。
85人中（長袍、中山服、背広等様々）。
出典：南京の中山陵にて、2009年に筆者撮影。

「表2　政治」は、中国国内政治に関わる内容と、それにまつわる清末から民国期までの男子の服装（主に長袍と中山服）で、19枚の資料をリストアップした。

1905年、2－1は、孫文と諸同志たちとの集合写真である。秋瑾の葬儀後[7]、列席者同志の集合写真であるが、服装は黒色、白色の中国式喪服を着用している。2－2、4は、同志との出会いの記念写真であるが、2枚とも、西洋式背広を着用し、共に携わっている人々は中国式服装の長袍の着用者が多いのである。2－3は、孫文が中華民国臨時総統に任命されたとき、総統府事務所入り口前で5つボタン付き、立ち襟Yシャツカラーのデザインの中山服を着用している姿の写真である。これは、孫文が中山服を中国の服飾社会に出現させた最初の中山服着用状況である。

2－5～8の孫文は、公務の写真が多いので中山服を着用している。写真に写っている他の関係者は、軍事服、背広の着用者が多い。1925年、孫文がこの世を去った後の集合写真が2－9であり、そこには、胡漢民他、政府中心人物が集合写真に写っている。政府代表の長老たちは、長袍馬褂を着用して前列に座っている。前列に長袍馬褂を着用している長老の着用状況は、時代背景の服飾状況を物語る印象的な一コマである。長老以外の多くの参加者は、長袍、中山服、背広、軍服等、多種多様な服装で写っている。

2－10では、主賓の蒋介石は、国民党二回五中全会議で長袍を着用して集合写真に写っている。35人中、長袍18名、中山服11名、背広が6名着用している。また、2－11でも、国民政府主席となった蒋介石は、長袍を着用している。本来なら、国民党代表者会議であるから、彼は中山服を着用しているはずなのに、長袍を着用して他国民政府代表者たちとの集合写真に写っている。中国人にとって長袍は、正装となっている事が伺われる。これらの写真は、新服制条例（1929年）が布告される前の写真である。

1931年、2－12は「カーハ事件」[8]の後、孫科と行政院のメンバーたちの集合写真であるが、10人中、長袍着用者が6人、背広着用者が4人いるが、中山服は誰も着用していない。しかし、蒋介石は公の写真である2－13、14、16、19では、前中心に5つボタンのついた中山服を着用している。2－16は、重慶

で談判時の蒋介石と毛沢東であるが、両者とも孫文考案の前中心５つボタンの立ち襟Ｙシャツカラーの中山服を着用して写真に写っている[9)]。

また、2－15は、主計処での中国重慶国民政府の出席者85人中、長袍は１人、その他の人たちは中山服、背広、軍服などである。写真の前列16番目に唯一長袍馬褂を着用している人物が存在する。彼は、陳其采といい、当時の中国では有名で軍人、政治家、銀行家、実業家といった多彩な肩書を持つ人物であった。

2－17は1947年、中国国立中央研究院評議会に監査委員長をはじめ36人のメンバーが参加した。36人の服装は、背広34人、長袍１人、軍服１人で中山服の着用者はいなかった。2－18は、国民政府代表達86人の集合写真であるが、中洋融合の服装着用状況であった。

2－19は、1948年、南京での国民政府の代表者たちの写真である。85人の服装は、長袍、中山服、背広と多種多様であった。1948年３月29日、南京にて国民政府代表者会議が行われ、大会の出席者は1,679人であった。この時は会議という公の場であるので、蒋介石は当然中山服を着用している。

以上、「表２　政治」では、中国国内政治に関わる人々の集まりで、中国式服飾と西洋式服飾の服装がどのような着用状況なのかを検証した。「１．生活」の表では、中国の生活の中で男子の服装（主に長袍＆中山服）がどのような着用状況なのかについて検証した。

中国式服装の代表である長袍や長衫は、中国の伝統衣裳ゆえ1940年代末までも中流階級の知識者や年輩の人たちに継続して着用されていた。反対に若者たちは、清末から中国に西洋文化が入り、外国の生活にあこがれて留学生活を試みる若者たちも増え、積極的に西洋式服装に挑戦し着用している。

「２．政治」では、政治的色彩に関わる会議や集合写真での衣服の着用状況であるから、参加している人たちは、ほとんどイデオロギーに合わせて衣服を着用している事が、生活上での文化の変化や過去の風習で服装を着用している「１．生活」との大きな相違点である。

国民党のリーダーとなった蒋介石は、公の席では殆ど中山服を着用し、1948年の監査院第一回会議でも中山服を着用している。「表２　政治」では、当時

の党派別集合写真に的を絞り、参加者の服飾状態を考察してみることとした。

おわりに

小稿は、清末から民国期にかけての長袍と中山服を中心に、中国の服飾社会に於いて男子服装の研究を写真資料51枚と、文字資料で考察した。そのことから得た、今回のテーマの論点をまとめてみる。

第1点、民国政府に入ってから、初めて中洋式服飾の融合を、正式な民国服制条例として布告し、服飾制度が発令された。民国元年（1912）、西洋の服飾を参照し、中国人の礼服を規定した。それにより、清末まで長い間続いた中国伝統の服飾が衰退し、西洋式服飾が公の礼服、大礼服として脚光を浴びるようになった。その時、国民の礼服は、西洋式燕尾服と背広の2種類であった[10)]。民国期に入り外国に留学する若者がますます増えていった。それゆえ、中国に西洋の文化が入るようになり、特に服飾の世界は西洋の新しい風が入り、中国人の関心を誘う事が多くなった。このことは、当時の政府政策として近代化の過程として、国民の生活が西洋になじめるように、また、関心を示すように身近な服飾文化から改革していったのではないだろうかと、「生活」の表1－2を参照して伺えた。

第2点、民国18年（1929）、新しい服制が規定された。1925年、孫文が死去し、蒋介石が国民党党首となり、中華民国を立ち上げ、孫文の考案した中山服を中国の服飾社会に広めていった。新しい服制が規定されてから、写真収集の表のデーターから伺えることは、民国期にかけて中山服の着用者がとみに増えている。また、長衫を着用して写真に写っている若者たちが多く、西洋式服装を着用しての家族写真が多いのが目立った。服制が規定されてから、年代別の服装の着用状況がはっきり写真に現れている。若者は長衫や背広を着用、年配者は長袍や長袍馬褂を着用して写っている。服制の規定により、中国人の服飾に対する選択肢が増え、規定内で自由に服装を着用できるようになったのではないかと垣間見る思いがした。

なお、今回、写真資料から得た分析からいくつかの事柄が解明できた。まず、中国式服装の長袍の事であるが、①長袍・馬褂、長衫は、なぜ、長い間、

中国の服飾社会で存在し続けたか。中国の気候と風土、長年の風習により、中高年の人々に愛用し続けられたのではないか。②背広と中山服は、仕立てるとき、アイロンを使用するが、長袍・馬褂、長衫は手仕事が多く、長衣であるから、縫う部分が少なく、西洋式服装の上下服と比べて手がかからない。素材によっては、アイロンかけの必要がないので、年輩の人たちには重宝がられた。また、単一デザインの服装であるから、着易さも理解されているのではないかと推察する。③長袍・馬褂、長衫の着用者は、保守的な風格と温厚に見える。特に民国時代までは、長袍・馬褂を着用していることで、商売の取引は信用を得たという事である[11)]。

一方、西洋式服装の中山服は、中国革命の父と言われた孫文が考案した服装であった。表1－1と表2のリストアップに掲載されているように、孫文は、各公会の場所へ中山服を着用していき、孫文の目的と任務は明白であった。彼は各場所で、全ての民衆に中山服を薦めて世界の人々に中山服を紹介した[12)]。孫文の主旨に賛成の人たちには中山服は着易く、実用的であったが、誰もが必ず着用できるとは限らなかった。先行研究で得た陳蘊茜氏の民国期初頭に表現した中山服の存在についての内容で、中山服は当時の若者たちの「流行となった」と、論じているが、そのことは、当時の若者たちの関心度は高かったと思うが政治的シンボルでもあったので、誰もが必ず着用できるとは限らなかった。当時の中山服は他の服装と比べて、高額の服装でもあり、平面（つるし状態）で眺めている状態では魅力のある服装ではなく、ボディに着用して初めて重厚なシルエットがかもしだされる服装であった。

また、先行研究で得た内容で、中山服の広がりについてアントニア・フィナネ氏は、1920年、民主革命の後、北部（現在の北京周辺）の人々の間で中山服の着用が増えてきたと、述べていたが、この当時の北京は、写真の収集で見る限りでは、中国式服装の長袍着用中心の服飾社会であった。ただ、1－2－5の写真参照によると、「中国人の伝統家庭の家族」の見出しで紹介されている写真は、1920年、中山服を着用している男性の写真が掲載されている。残念ながら、その写真の撮影場所は不明である。

収集した写真を参照して総括すると、中山服と長袍・馬褂や長衫は、デザイ

ン様式が違い、中国の服飾社会において、それぞれの用途、住んでいる場所、環境、生活レベルにより愛用されている服装であった。

なお、中国は広大な土地を有し、多くの国民がそれぞれの環境と風土や習慣によって服飾状態が違うことが、今回の写真資料から年代を越えて伺われた。特に北京は、北方に隣接していることもあり、家族の集合写真では、長袍・馬褂を着用している男子の服装が多かった。しかし、上海では民国初期から、大人は西洋式服装を着用して記念写真に収まっている人達が多く、子供は西洋式服装のブラウス、セーター、半ズボンと現代と変わらぬファッションで写真に写っている家族写真が多かった。また、新服飾条例が制定され、服制が規定してから20世紀前半期にかけて、上海では、中山服の着用者も存在した。さらに、中山服風の服装で写真に収まっている高校生、中学生も見受けられた。

最後に、「表２」での政治中心の写真収集であるが、写真収集の全体を参照すると、どの写真も参加者は、イデオロギーにあわせて服装の着用状況が決まっている。例えば、2－9～10によれば、1928年、1929年頃の国民政府の集会であるが、長袍と中山服や背広の着用者が混ざっている。しかし、2－15、1946年の重慶国民政府の集まりでは、85人中、長袍が１人、背広が数人、圧倒的に中山服の着用者が多い。また、1948年の国民政府代表会議の時の集合写真は南京で開催され、やはり中山服の着用者が多いことが写真にて伺えるが、これは、蒋介石が国民党の主席になり、中山服は国民党の男子の服装のシンボルであることが実証されていることになる。西洋式服装の背広は、写真収集から見る限り、特に民国期にかけて、中国の服飾社会において舶来の洋服として着用され、年代と共に自然に中国人の服装として着用されていることになる。

以上、清末から20世紀前半期までの、中国人の男子服装着用状況を研究し、考察した内容を言及し、明らかにした。

注

１）廖军・许星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年、74頁。

２）陳志華・朱華『中国服装史』、中国紡績出版社、2008年、191頁。

3）山内智恵美「服飾を通してみる漢民族の民族意識――中華民国期を中心に」、『北海道文教大学論集 2 、133−146』、北海道文教大学出版、2001年、135頁。
4）陳蘊茜「身体政治：国家権力与民国中山装的流行」、『学術月刊第39巻 9 月号』、南京大学出版、2007年 9 月、2 頁。
5）Antonia Finnane『*Changing Clothes in China*』、New York、Columbia University、2008年、184頁。
6）企領文装：企領文装は「企領民装」とも言った。「企領」の意味は、立ち襟、幅がある立襟また直衿のことである。男子の中山服の立襟も同じである。「文装」は、インテリジェントが着る服装という意味でもあるが、軍装との違いを分けた言い方でもある。南方華僑で流行し、企領文装は麻素材で肌ざわりが良く、広東人は三つの内ポケットを「民装」の間のためにとし、「民主装」あるいは「文装」とし、軍装と区別するためでもあった。企領文装はますます発展し、文革前は多くの広東人が着用した。後に軍装は青年装となり、「文装」あるいは「直衿文装」の名称となり、色は灰色と藍色であったが、北京の人たちはさらに濃い灰色、藍色を着用したと言われている。
7）秋瑾は中国の女権と女学思想の指導者であり、近代革命志士である。（1875年〜1907年 7 月15日）
8）カーハ事件：民国20年（1931） 2 月18日、胡漢民が蒋介石に監禁されると、胡と交友のあった孫科は蒋介石に反発する。まもなく、満州事変が発生したため、蒋介石と和解し、翌年元旦に孫は行政委員長に任命された。しかし、1 か月と持たず辞任した。http://ja.wikipedia.org/wiki/0/oES0/0AD0/0E70/0A70/091（2014/01/23）
9）天児慧編、他 5 名『岩波現代中国事典』、岩波書店、1999年 5 月22日、248頁。：重慶談判は、1945年 8 月から10月にかけて、重慶で行われた国民政府、共産党間の交渉。当時、蒋介石は、中国国民政府主席。毛沢東は、中國共産党初代中央委員会主席である。なお、1945年 8 月30日に開かれた談判が長引き、「双十協定」としてまとめたのは10月10日であった。
10）廖軍・许星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年、75頁。
11）華梅『中国近現代服装史』、中国紡績出版社、2008年、77頁。
12）胡波『中山装』、広東省出版集団・広東人民出版社、2008年、101頁。

参考文献

Antonia Finnane、*Changing Clothes in China*、New York、Columbia University、2000年
山内智恵美『汉族服飾文化研究』、西北大学出版社、2001年
立法院編訳處編『中華民国法規彙編』、「第11条司法―服制」中華書局、1924年

萬仁元『孫中山與国民革命』、台湾商務印書館股份有限公司、1994年（香港。台湾初版）
山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版壱　老照片』、山東画報出版社、1998年
山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版弐　老照片』、山東画報出版社、1999年
山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版参　老照片』、山東画報出版社、2000年
山東画報出版社『老照片』編輯部『珍蔵版肆　老照片』、山東画報出版社、2001年
邓云乡『文化古城旧事』、河北教育出版社、2004年
陳志華・朱華『中国服装史』、中国紡績出版社、2008年
包銘新『近代中国男装実録』、東季大学出版社、2008年
張明『外国人拍摂的中国影像』、中国摂影出版社、2008年
康有為『請断髪易服改元折』、『中国近代史資料丛刊・戊戌変法Ⅱ』、神州国光社、1953年
華梅『中国近現代服装史』、中国紡績出版社、2008年
胡波『中山装』、広東省出版集団・広東人民出版社、2008年
陳蘊茜「身体政治：国家権力与民国中山装的流行」、南京大学出版社、2009年
廖军・许星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年
袁仄・胡月『百年衣裳』、生活・読書・新知三联書店、2010年
潘光哲『何妨是書生』、広西師範大学出版社、2010年
趙軍、他5名執筆者『孫文・梅屋庄吉と長崎』、長崎県・長崎市・長崎歴史文化博物館、2011年
丁錫強『中華男装』、上海世紀出版股份有限公司学林出版社、2013年
王煦等『百年中国社会影像』、三聯書店（香港有限公司）、2013年